
暗運希空 終わりなきサイクル

愛夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗運希空 終わりなきサイクル

【著者名】

N4485S

【作者名】 愛夢

【あらすじ】

少女と一人の少年「海斗」とのファンタジー

じぶかぬ思い

はてしない闇の世界、手を伸ばしても届かない光
どうしようもない暗黒の国世
憎悪は日に日に増してゆく、心の中におもく魂となつてのしかか
つてくる

赤みをおびた瞳はなにもない空をみつめつづけていた。

「海斗様、私はあなたを信じております。今もずっと」

その言葉を合図に暗闇からひとすじのあわい光があたりを悲しく
てらした

「ああつ光、またこの光もスグきえるのだろうか、」

少女の目の前をゆらゆらと不規則にとびまわり、つとともりを
消した。

「やつぱり、仕方がないのだろうか。」

そういうと1羽のセキレイをうみだし、なにもない空上へ打ち上
げた。届かないとしりつつも、

海斗は少女の声で目が覚めた、
ひどく悲しい声の少女、切ない

「チツ、なんだよ」

汗だくの体をタオルで拭きながら夢を思い出す。

最近、毎日見ている夢少女が自分を「様」づけで呼ぶ、いつもそ
の少女がセキレイをとばすところで目が覚める。

自分が特別な人間だと言うことは知つていた

なぜだか分からぬでも自分が何においても特別にあつかわれて
いる。

親などいない、友などもつくれたこともつくれないと思つたことも
なかつた、自分で生きていた。

でも、あの少女が気になつてしまつたがいい。

海斗は、手元にあつたするどいハサミをひろいあげ刃先をまじまじとみつめ指をすべらすと紅い血が指とハサミをつたい床にたれていく

「 こんなことなんても意味ないのにな ・・・ 」

そういうと自分の腹にハサミを勢いよくつけた。

無表情のままハサミを引き抜く

するどい刃先から血がたれる。

腹には赤黒いハサミの穴があいてる

その穴はじわじわと小さくなり、とうとう消えた。

「 ハア ・・・ 」

ため息をつきキッとあたりをにらむ

自分をこんな体にしやがった母親、おかげで俺は、死ぬことすら出来やしない

どんなに血が流れても、どんなに切り刻まれようとも十秒あれば治つてしまう。

痛みなど感じない穴のあつた腹に手をあて目を閉じて小さく、つぶやくように小歌をうたいとなえる。

その様子を窓辺1羽のセキレイがみつめている

その口は確かにうごいた

お兄さま ・・・ と...

美しいセキレイ

「声は届かないのだろうか、」

つぶやきつつも心の中では分かつていた、届いていないと、セキレイがあちら側にとどく確立は限りなく低い、ほほ〇に近いだろう、届いたとしてもたどりかなければ意味はない

だからと書いてセキレイをつくり、飛ばし続ければ、自分も危険な状態になる。

唯一この空間に光が迷いこんだ時にだけにしかつくれない鳥『セキレイ』

たいてい光はこの空間へ迷い込めばすぐに輝きを失つてしまつ
「まあ、海斗様がつくりだした光が迷うことがあれば私はこの空間から救われるのだけど、」

だつて、必ず光は主のもとへ戻れるのだから。

その時、1羽のセキレイがヘトヘトになりながら戻つて来た
セキレイは少女の差し出した指へとまると血ら一本の羽根を引き抜いた

そしてそれを少女へ渡す

「ありがとう、お疲れ様、あなたが初めてよ。生きて戻つて来た
セキレイは次も、また、頼むわね・・・ゆつくり休んで・・・」

そういうとセキレイを優しく片手で包み込み残りの片手で指をならした。

セキレイは、魔法かまじないのようみごとに消えた

そしてさつきの羽根を次は両手で強く握りバラバラに、小さく、細かくちぎつていぐ。

そしてそれをツーと吹き飛ばすと、セキレイが見たものが全て映像となり映し出されている、

腹をハサミで思いつきり、ためらわずに切つた海斗様、

その後に歌う小歌、なつかしい

今は記憶の5分の3が消滅している海斗様、イエ、『海兄様』その歌は私が幼い頃、自分に対して歌い続けた歌

「兄様その歌を歌つてはなりません。」

呪われた歌など歌わないで・・・暗運と言つ名の呪われた歌を悲しみのうたを

「おやめください・・・」

夕闇の女王まじょが一人の子こに呪のいをかけました

歌が好きなその子はその口から歌が歌えなくなりました。

でも、その子供は、女王まじょの気きまぐれな呪のいを・・・

歌の歌えない悲しみを・・・

怒りにかえて、

必死ひじに、

必死ひじに

うたいます

どんなに暗い運うんだつて

だんなに悲しくたつて

時はいずれたつのです

もつ、明日などないと思つていようがいまいが

その子は歌を歌えない

悲しみのフチの裏で美しい花などさきません

もう一度

もう一度

どうか、どうか

この歌を歌わせて

この歌のとうり

その子の運は暗く染まつて行くのだから、

おやめください！

まだ

「ツもう聞きたくねえ」

耳を塞¹いつとすると泣¹いづとするとそんなことじや限がない。

苦しい、消えたはずの苦い過去

いや、消された記憶、よみがえる、あふれる

少女の悲しくも美しい声を聞くたび

思い出すは残酷な血しぶき

「やめろーもう、一度とみせるなーー！」

頭の中に狂¹うあの少女が叫¹ぶ姿が写る

ベッドで頭を抱え、耳を塞¹ぎふれる自分

「やめろー やめろー やめろーーー！」

「ハア・・・・ハア・・・・はあ」

あらい呼吸をしながらT・シャツの胸元をギュッと握る

「く・・・つなんだよ、なんなんだよー！糞野朗ー！」

体中、汗がふきでている

「たのむ、もう、見せないでくれ。」

どうして母親は俺から一部の記憶を消したのだろう
すべてを教えてもらおうじやないかッ！

データ消滅者のたぐらみ

少女がセキレイを飛ばしたのを、ある所で水晶から見ていた者がいた

「フフフフもはや翼のない天使ね、海斗さえいなければこいつのものよ」

「母様あなたはツ・・・それでもあいつらの親ですか！？」

「なによ陸斗、あなたが海斗とかかわってもいいのよ？」

「それは・・・」

「でしょ、しょせんそんなんものよあなたは」

「ツ！？」

「陸斗、はじめはあなたでしょつと愚つたわでも」

言葉がとまつた

少しためらい、足元を見てはなす

「・・・あなたは純粹すぎた、脳内データを消せなかつたの・・・」

「・・・・・・」

「まあ、今も夢音と入れ替えようか迷つて いるけど天音は」

残酷な母親、父親を事故にみせかけ殺し、今は自分の子供達を苦しめ、遊んでいる

「陸斗、ちょっと来て・・・」

手招きをする夢音は体をドアで半分以上隠している

「何？」

傍によると

「いいから！」と強く手をひっぱり陸斗を部屋から引きずりだした

静かな廊下

パタパタと歩く音が響く

「はいって

「ああ。」

そこは408号室

唯一防犯力カメラと盗聴器がない部屋
入つて一息つくと夢音は話しだした

「海斗の家が分かったの」

何処に持っていたのか、ファイルから一枚の紙を渡した

「今から行こう」

真剣な夢音、

うなずくほかはないだろう

海斗に全て話してやる、ばらしてやる

そして天音を助け出し、母を裁いてやる！

そうなつた時あの化け物はどう考えるだろう

今に罪を認めさせてやる

俺の脳内データが消えなかつたのは海斗が助けてくれたからだ

純粋など馬鹿らしい

演技など飽きてしまつた

「夢音、演技をやめた俺をどう思う？

「・・・前よりずっと勇ましい！」

なにが純だ

あの女はもう人間ではない

アイツが殺したのは死年をつかさどる神だ

特殊なやりかただつたのは気づいていたからだろうか・・・

いや、気づいたはずはない、生をつかさどる神がここに2人存在するのだから

海斗おまえの力で復讐しろ！

死をつかさどる神よ、2人が出会つたときあの化け物は裁きを受

ける

2人は窓から下へ飛び降りた
身軽に夜の中をはしる

海斗！其の名を呼びつつ、2人の神が動き出す。

2つの神

うなりづける海斗

「…ひなせひなせ」

夢の主ロジクのまゝなる事

叫ぶあの少女

手に握られているのは刃

ヤマニヤ・天音

卷之三

夢の中で叫んだ少女の名前

天音その名を聞くと、心がえぐられる痛みがはしる

用の書二十二

田の前にいたのは陸斗と夢音、いつの間にか立っていた研究所では大騒ぎになつてゐるはずだ、ここに来る途中、探し回る巡使の姿を多くみた。

「だつ 誰だよ！」

2人はあれから2田かけてここについた

思ひ出せば、さ前に語りた

可故ごがもべるくのの名前

自分の名前を口にしたとたん体に痛みがはね上がり海斗を苦しめた

やめるー陸斗ー思い出させるなー」

のたつりまわる体、イタイ

「海斗、痛いのはわかる、でも、おまえの記憶がもじらなきや天音を救えない、」

「ぐつ、ああ、んつぐつあ、あ、天音ーぐつ、つくつそおおーー！」

「

「死神よ、力の使い方を思い出せ。」

「無理だよーー、ああああああ、んつぐ、ハア、ハア、フー、

」

息を整え顔を上げた海斗は別人だった。

「バイバーイ」

そう言つと陸斗へカマ先を向けた。

神を思い出したとたんカマが、死神のシンボルがあらわれていた。

「ちつ、あぶねつ」

思い出したのは極一部、一番荒れていたときの海斗。

「陸斗ー」

叫ぶ夢音に、

「うるせえー夢音ー、この偽善者がーー！」

そういうて闇の籠をつくりだし、そこに夢音を入れてしまつた、そこに入ればもう出口はない、、、

海斗がだしてやうと思わなければ一生出られない場所、裏の地

獄。

「夢音ー」

「おまえは自分の心配すれば？？」

そういうてカマをおもぢやのようにふりまわす海斗

「少し遊んでくれよ陸斗、ちょっとしたゲームをしない？」

ゲーム始動

「やつく海斗を陸斗は思つ。

「いつ、本物か？

目の色が紫じやない、色が・・・瞳の色が黒に戻つてゐる、なのに神？どういうことだ・・・

考え込む陸斗を水晶からのぞく1人の女

「フフフッ、そんな簡単におわらせられるか」

「やつと笑う女の後ろに2人の男、

「楽しませてね、我が子達・・・」

そう言つて別の水晶に目をやつた。

手をかざしその手をぎゅっと握つたとたん、水晶の中の天音と夢音の顔が苦痛にゆがむ。

水晶の後ろの水管、中には本物の海斗が、多くのチューブにつながれ、規則正しく呼吸を繰り返していた。

女は2人の男を退室させた後、静かに水管へ近づく、手をペタッと近づけおをよせてそこからもう一度、水晶をのぞき見る。

「ゲーム開始の鐘を鳴らそうか」

笑ついていてもどこか悲しい目の中の女、

「この建物内に居場所はない。

愛しいなど生ぬるい、そう思わなければ・・・

今こそ、死がある、一族全ての、
悲しみの涙を流す事など夢のまた夢。

さあ、ゲームを楽しもつか。

陸斗、お前の脳内データの一部はここにあるからね・・・

裏の地獄（前書き）

残酷描写あり、書いてても怖いくらい（泣）

個人差ありますので、見たければどうぞ（笑）

裏の地獄

「ゲーム……だと？」

「ああ、こっちの勝利は確定してるがな」

「…？」

驚く陸斗にニヤッと海斗は笑みをこぼし、指をパチンと鳴らした。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアツアアア」とたんに響く悲鳴が頭に響く、共鳴し、頭が割れるような頭痛がした。

「ツ・・・何だよ！ツ」

クスクス笑う海斗

「見たいか？何が起こっているのか」

そう言つと、鎌を自分に突き刺し、流れ出でくる一滴の血を指にとつてなめた。

「見せてやるよ」

そう言つと、鎌についた血を全てなめきつた。

そして、海斗の唾液と、少し血の残つた鋭く男とは思えないほど、美しく整つた爪を陸斗の額に深々と突き刺した。

「ぐえつ」

うなつた陸斗だが、痛みを感じることはない。とたんに流れる、2人の映像・・・

狂つたように叫んでいる。

「なつ何をしているんだ！一人は…」

クスクスと笑う海斗は、無邪気に、贈り物を貰つた子供のように

笑つた。

「2人はものすゞーくいたゞい思いをしているみたい 可笑しいねえゝ神様なら痛くないのにねえゝ
誰かが痛めつけてるみたいにね
まあ、俺がやつたんぢゃないから、分からぬけどね
でも、俺に命令してくる奴がいるんだつ
そいつがこう言つてゐる『陸斗をそこへ入れろッー!!』ってね
2人を助けたいんでしょ？だつたら、入つてよ」

だんだん幼い声になつていく海斗・・・

「お前、すぐびびつたりするよなあゝうけるよなつづつする？行くのか、行かないのかあ？」

むつとした陸斗だが、さつきの海斗の言葉に嘘はないだろつ。命令を送つてくる奴がいるとすれば、監視されている可能性が高い。演技に取り掛かるしかないな・・・

「いつ・・・行くよ。」

笑う海斗は陸斗を闇へほづりこんだ。

闇は大きく口を開け、しばらく消えることはなかつた。

「まあ、精々（せいぜい）頑張りなよ」

「うふふふふ・・・あはつあはつはは

大爆笑の4人の母、と言う皮をかぶつた化け物。

水晶を取り、少女のようにひざを丸め、冷たく笑う。目は死んだような底なしの黒。

口は笑うことしか出来ない人形のようになつていた。

海斗（前書き）

こんちはあーーーー。

ゆうみや の友達の 輝奈 です。

今回は私が変わりの更新しました

まあ、源本を書いてから更新してるので中身は変わりません。

これは2人で考てるものでして、私もアップさせてもらってる
ので、暗運希空の短編版を私のほうで出すかもですね。
2人でもつといい作品描くよつにがんばりますね

「ポコポコ」と水管で息をする海斗の声は、化け物の笑い声によって見開かれた。

「僕、何をしていたんだらうつ..」

「疑う」と知らないきれいな瞳

水管をドンドンと叩き化け物をきずかせた。

「あれ？ 起きちゃったの？ まあいいか。」

そういうと水管から海斗を引っ張り出した。

「ありがとう、お母さん。」

バスタオルを無言で掛けられた海斗は、なにか不思議そつな顔をした。

それでも、何も言わず体を拭き服を着た。

「あら、おわった？」

その声を聞き安心したのか「コツ」と笑い、勢いよく頷いた。

「うん…………！」

キヤツ、キヤツと笑う海斗。

「いつの時は10歳で止まっている。

化け物はニヤツと笑うと優しく言った。

「海斗、病院って注射しようか。」

「ナゼ？」

ギモンの顔に不安はない。

そのことに罪悪感が胸をよぎる。

そんなこと、そんな感情など生ぬるい。

「海斗はずーと「コで寝てたのよ。水管で。だからよ。」

「そつか、じゅア行こうよ。注射つて痛いの？僕、がんばるよ。」「うん、とっても痛いみたいだけど、痛くなにように麻酔、入れてもらおうね。」

「分かった、行こつか、お母さん。」

そう言つて水晶部屋を出た。

「ツチ、ドコだよ。スグに悲鳴が聞こえると思つたのに。」

イライラしながら陸斗は暗い暗い闇の中、白銀の光を作り出し辺りをリンリンと照らす。

「ああ……………もつ……………探して来い！」

「……………」

また、陸斗はもう二つの白銀の光を作り別々の方へ勢いよくブン投げた。

「ツツツツツツ！？」

グルルルルル……………

「番犬か……………」

番犬に追い駆けられ走る陸斗を誰も知らない。

لارا؟

「ええ、そ、う、」

顔が少し緊張している。

愛しい、
愛しい我が子。

• • • • •
愛しい、愛しい我か子。

ベットに寝かされ麻酔を打つ。

大きなかぐりをしたかと思ひ、エーヘーと叫び込んでしまった。

「うう、一でいい。あつがいい。」

「結構早かつたんですね、起きられ

「そうね。まあいいじゃない!」

準備は整つたよ海斗・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

もうすぐこっちの海斗は痛みが体を駆け巡る、顔が痛みで歪んでくるだろう。

自分を取るか。
兄弟を取るか。
選ぶといいわ。

一
た
の
し
み
ね
」

心にもなし言葉を並べる

でも懶れてはならない 満面の笑みで笑う

○ おのづかの詩情に感ずる
花の木の木

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4485s/>

暗運希空 終わりなきサイクル

2011年10月8日23時35分発行